

(国語)

「対話的な学びを取り入れた物語文の指導」
—言語力を育む指導のあり方—

大阪市立田川小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

本校では、学校教育目標「豊かな心を持ち、知・徳・体をバランスよく身に付けた粘り強く取り組める子の育成」を設定し、学力の向上、豊かな人間性の育成、体力の向上を学校経営の重点として、日々の教育活動を展開している。

本校の児童の現状と課題を考えると、学級・学年や学年の枠を超えての児童間のトラブルがあった。トラブルが起こる要因はいくつか考えられたが、その中の一つとして、コミュニケーション力や言語力の低さが考えられたため、3年間を見通して国語科の研究に取り組むことにした。最初の1年目は、「言語活動を通して望ましい人間関係を育む」として国語科の基本的な学習過程と指導方法の工夫について研究を進めた。そして本年度は研究主題を「対話的な学びを取り入れた物語文の指導」とし、さらに「言語力を育む指導の在り方」を副題として研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

本校の児童の実態として、児童間のトラブルが多発していた実態がある。その原因を探っていったときに、自分の思いや考えを上手く言葉で表現することの苦手な児童がいること、言葉での表現が上手くいかないことで誤解を受けるような表現で話をしてしまうこと、さらには相手が伝えていることを適切に理解することが難しく違う意味にとってしまうことなどがあり、結果として気持ちの行き違いが生まれトラブルに発展していた。そこで、国語科の時間を中心として自分の思いや考えを最後まで伝え、他者の思いや考えを最後まで聞き取って、互いの相違点や共通点を見つけたり理解したりする力を育むことが大切だと考え、語彙力や読解力も含めた言語力を育むことをねらいとした。物語文に絞ったのは、登場人物の様子を読み取ったり気持ちを考えたりする学習が、国語全般に苦手意識を持つ児童にも分かりやすく、自分の意見をもって学習に取り組むことができると考えたからである。

3. 研究の概要

研究主題に迫るため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 主体的に課題を追求・解決していくための手立て

- 指導者が十分に教材を読み込み、ねらいに迫るために重要な文章や言葉の絞り込みを行う。
- 児童の実態を把握したうえで、指導者側からの課題提示ではなく、児童の初発の感想や疑問を生かした課題設定にする。
- 物語文の叙述から自分が読み取った内容を基に課題を設定する。この課題は、すぐにわかるような安易なものでなく、いつra考えてもわからないような難解なものでなく、教材文の読み取りや友達との対話を通して思考を働かせることで解決にいたることができるものにする。

視点② 話し合いを深めるための手立て

- 一人学びの時間を取り、課題に対する自分の考えを持つようにする。
- 一人学びでの考えの支援となるような思考ツールを用いる。
- 一人学びで考えた内容を基に、ペアやグループなど課題解決に有効な形態で話し合う場を設定する。
- ペアやグループで話合った内容を学級全体で共有し、課題に対する答えを学級で練り上げる。
- 学級全体で話し合った内容がより理解しやすくなるような思考ツールを指導者が用いて板書をまとめていく。

4. 実践事例

第1学年「いろいろなおはなしをよもう」

教材名「おとうとねずみチロ」

第2学年「ばめんごとによもう」

教材名「お手紙」

第3学年「感想を伝え合おう」

教材名「サーカスのライオン」

第4学年「人物の気持ちの変化をとらえよう」

教材名「走れ」

第5学年「物語のおもしろさを見つけよう」

教材名「注文の多い料理店」

第6学年「人物と人物の関係を考えよう」

教材名「風切るつばさ」

5. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 低学年では、人物に焦点を当てて取り組みを進めたので、何について考えているかが明確になった。また、考えを視覚化するための思考ツールを児童の実態に合わせて用いたので、文章で表現することが難しい児童への支援となった。話し合いを行うときには、低学年はペアに絞って話し合うようにしたので十分に意見を言うことができた。また、どちらから話すのか、どのように聞き返すのかなど簡単な話型についても指導をしたので、混乱することなくスムーズに話合うことができた。
- 中学年では、初発の感想を比較分類したり、話し合いたい文章を絞り込んだりして学習を進めたことで、意欲的に取り組むことができた。また、考えを整理する思考ツールとしてクラゲチャートを活用したり挿絵を効果的に使ったりしたことで、整理して話すことができた。
- 高学年では、児童の意欲を向上させるために、「なぜ解きの挑戦状」を用意したり、登場人物の心の距離を視覚化したりしたことにより、自分から進んで課題に取り組もうとしたり、他者との考え方の相違点や共通点に気付くことができた。
- 全学年を通して、学習課題や挿絵などを掲示して学習を進めることができ、学習の振り返りや思考を深めるときの支援となった。児童の感想や疑問を課題設定に生かしたため、国語科に苦手意識を持つ児童も進んで課題を解決していこうとする姿勢が見られた。
- 若手教員を中心としたメンター研修の中に、指導案検討①を位置づけたので、教師の教材の理解が深まり国語科の指導力向上に役立った。
- 全教員が研究授業、公開授業を国語科で行い、授業力向上に役立てることができた。

(2) 今後の課題

- 課題に対して、同化して考えるのか異化して考えるのかを絞り切れていないところがあり、児童の思考を混乱させることがあった。
- ねらいに対する評価基準が十分に練れていないことも多く、学習においてどこまでを求めていくのか、必要な学習活動は何かという計画が十分とは言えず、評価と指導の一体化の視点からも研究を継続していく必要がある。